

春の語源 Ⅱ
春は万物が「発る」季節

● 初春

りっしゅん・新歴二月四日頃

立春

春の気たつを以て也

二十四節気での一年の始まりの日です。さば「余寒」や「春寒」と呼び、冬の寒さとは区別されます。

一年で寒さが最も厳しい時期ですが、少しずつ日脚も伸び、暖かさが増してきます。春が産声を上げる日です。



雨水

陽気地上に発し雪氷とけて雨水となれば也

うすい・新歴二月十八日頃

昔は、この雨水を目安に農耕の準備を始めていました。

空から降って来る雪が、この頃から雨へと変わり、積雪や氷が解け始める時期。水分が多い雪は、結晶同士がくっつきやすく、大きな雪片になりやすい。その姿を花に例えたものが「牡丹雪」です。



● 仲春

けいちつ・新歴三月五日頃

啓蟄

陽気中に動きちぢまる虫穴を開き出れば也

啓蟄とは、蟄虫啓戸の日という意味です。「啓」には「ひらく」という意味、「蟄」は「虫が地中で冬ごもりをする」という意味があります。春の気配を感じた虫たちが、穴から出て来る頃です。

実際に虫たちが活動を始めると、もう少し先です。



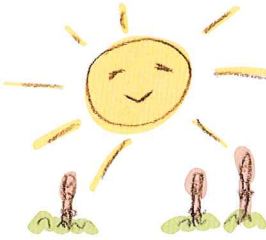
春分

日天の中行きて昼夜等分の時也

しゅんぶん・新歴三月二十一日頃

昔は春分を目安に種蒔きをしていました。昼夜の長さがほぼ同じになる日。春分以降、昼の時間が徐々に長くなります。現在、国民の休日にもなっているのが、馴染みの深い節気の一つです。

春分をはさんで、前後七日が春の彼岸です。



● 晩春

せいめい・新歴四月四日頃

清明

万物発して清浄明潔なれば此芽は何の草としれる也

江戸時代に書かれた「暦の解説書・暦便覧」にもあるように、「すべてがけがれなく明らか」という意味の清浄明潔を略して、清明といいます。この時期の晴れ渡った空はまさに清浄明潔そのもの。

また、土から顔を出した小さな芽も、この頃になると種類が判別できるまでに成長しています。



穀雨

春雨降りて百穀を生化すれば也

こくう・新歴四月二十日頃

「穀雨」は百穀を潤す春雨という意味です。この時期には萌え出た若い芽を育むような長雨が、しとしとと降り注ぎます。この頃に降る長雨を「春霖」、降ったりやんだりする雨を「春時雨」と呼びます。

また菜の花が咲く季節でもあるので、「菜種梅雨」の別名もあります。



二十四節気

「春」にまつわることは

「春告草」
「春告魚」

「春告草」は梅。他に先駆けて花を咲かせ、待ちに待った春の訪れを知らせる花として珍重されました。

「春告魚」は鯉。春、産卵のために北海道沿岸に現れます。現在は乱獲等の影響で、漁獲高は減少しています。なお、鯉の卵「数の子」は「カド（鯉の別名）の子」が訛ったものなのです。

「春告鳥」は鶯。江戸時代は鳴き声の美しさを競わせる「鶯合わせ」が行われていました。

「夏」にまつわる
ことば

「初鯉」

目には青葉
山ほととぎす

初がつほ
これは江戸中期の俳人・山口素堂が詠んだ、有名な一句です。
江戸時代、粋な江戸っ子たちは競って初鯉を食べたがりました。その人気ぶりは「女房を質に入れてでも食べたい」と言われたほどでした。

「紫陽花」

アジサイの語源は、青い花が集まって咲くという意味の「集真藍」が訛ったものであると言われています。
漢字表記の「紫陽花」は、もともとは唐の詩人・白居易が全く別の花に名付けたものでしたが、平安時代の学者・源順が誤ってアジサイにあてはめてしまい、それがそのまま現在まで残っています。

夏の語源

夏は「暑・温・熱」い季節

初夏

りっか・新歴五月五日頃

立夏

夏が立つがゆへ也

二十四節気では、この日から立秋の前日までが夏。野山には新緑が萌え、空は澄み渡り、日中の気温も上がってくる頃です。現代ではちようどゴルフデンウィークにあたり、レジャーで外出する機会が多い



仲夏

ぼうしゅ・新歴六月五日頃

芒種

芒ある穀類
稼種する時也

芒(穂先の尖った部分)のある穀物・稲や麦などの種を蒔く時期という意味です。昔の田植えは、現在よりやや遅いこの時期におこなわれていました。西日本は梅雨に突入する頃で、沖縄ではこ



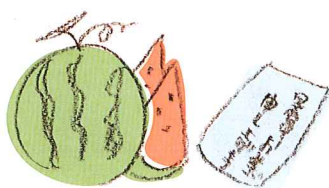
晩夏

しょうしよ・新歴七月七日頃

小暑

大暑来れる前なれば也

暑さが日増しに加わり、盛夏の兆しが見える頃です。小暑から立秋までの時期が「暑中」にあたり、この期間に暑中見舞いを出します。梅雨も終盤にさしかかり、集中豪雨が起りやすい時期です。

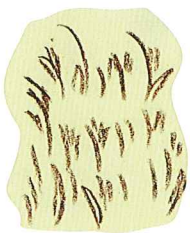


しょうまん・新歴五月二十一日頃

小満

万物盈満すれば
草木枝葉繁る

もともとは「麦の穂が実り、少し満ちて来た頃」という意味でしたが、転じて「陽気が良くなって万物が満ちたりる頃」という意味を持つようになりまし。初夏の日差しのもと、草木が次第に成長し、



げし・新歴六月二十一日頃

夏至

陽熱至極しました日の
長さのいたるを以て也

一年で最も昼の時間が長い日です。とはいえ難しいかもしれ



たいしよ・新歴七月二十三日頃

大暑

暑気いたりつまりたる
ゆえんなれば也

太陽が照りつけ、大地も蒸しかえるように暑い頃。このきびしい暑さを乗り切るために生まれた風習が「土用の丑の日」です。現代でも続くこの風習は、江戸時代に暑さを売り上げが落ち込





秋は草木が「紅」く染まる季節

|| 秋の語源 ||

● 初秋

りっしゅう・新歴八月七日頃

立秋

初めて秋の気立つが
ゆへなれば也

暑さが最も厳しい時期ですが、二十四節気ではこの日から秋が始まります。この頃が暑さのピークと言う事は、後は涼しくなるのみ。まだ気配すら感じられませんが、秋はゆつくりと近づいてきます。



処暑

しよしよ・新歴八月二十三日頃

陽気とどまりて初めて
退きやまんとすれば也

暑さがおさまる頃という意味ですが、実際はまだまだ残暑が厳しい時期です。しかし、空を見ればひつじ雲やいわし雲が現れるようになり、少しずつですが確実に近づくと秋の足音を感ずる事ができます。



● 仲秋

はくろ・新歴九月七日頃

白露

陽気ようやく重なりて
露こごりて白色となれば也

朝夕の風に涼しさが混じり、草花に露が宿り白く見える頃。ススキも穂を出しはじめ、秋の趣が一層濃くなる時期です。日本列島が、北から秋の色に染まりはじめます。



秋分

しゅうぶん・新歴九月二十三日頃

陰陽の中分となれば也

春分と同じく、昼と夜の長さがほぼ同じになる日。秋分を境に夜の時間が長くなります。春分と秋分は気温がほぼ同じと言われますが、実際は夏の暑さが残る秋分の方が十度以上気温が高い。



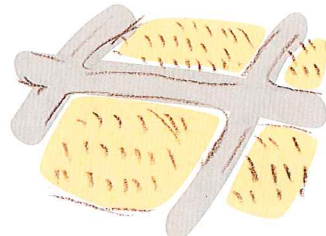
● 晩秋

かんろ・新歴十月八日頃

寒露

陽寒の気に合って
露むすび凝らんとすれば也

野草に宿る冷たい露の事を「寒露」と言います。仲秋の白露から寒露、そして霜降は露が霜へと変わる時期です。農作物の大敵である霜に細心の注意を払っていた昔の人々の暮らしが伺えます。

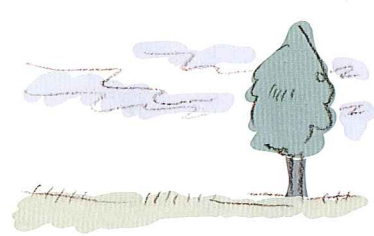


霜降

そうこう・新歴十月二十三日頃

露が陰気に結ばれて
霜となりて降るがゆへ也

秋が深まって霜が降りる頃。夜から朝にかけて急に気温が下がると、空気中の水分が植物などに凍りつき、霜ができます。北海道ではこの時期、初霜や初氷が観測されます。



二十四節気

「秋」にまつわる
ことば

「秋津」

秋津とは、トンボの古い呼び名です。秋津虫(秋の虫の意)の「虫」部分が省略されたもので、トンボは昔から日本の秋を代表する虫であったことが伺えます。秋津はその後、蜻蛉、「えんば」、「とんぼう」、そして現在の「トンボ」へと落ちてきました。なお、「えんば」は「重羽」が訛つたもので、現在では「えんま」に変化して大型種のトンボの名前に残っています。



「冬」にまつわる
ことば

「冬將軍」

言葉の由来はフランス軍
モスクワ遠征。
厳しい寒さと雪が原因で
ナポレオンが率いるフラ
ンス軍は敗退しました。
この出来事を、イギリス
人記者が「ナポレオンを
撤退させたのは冬將軍で
ある」と書いたのが起源
だとされています。

「忘年」

この言葉の本来の意味は
「自分の老いを忘れる」や
「お互いの年齢の差を忘
れる」でした。
現在の「忘年会」ように
「その年の苦勞を忘れる」
という使い方をはじめた
のは日本人です。
本来の意味に立ち返れ
ば、何も年末だけでなく
一年中「忘年会」を楽しめ
ますね。

|| 冬の語源 ||

冬は万物が「冷ゆ」季節

● 初冬

りつとう・新歴十一月七日頃

立冬

冬の氣立ち初めて
いよいよ冷ゆれば也

二十四節氣では冬の
はじめです。

氣圧配置も西高東低
の冬型に変わり、日
本海側の地域では、
雪空が多くなります。
冬の使者・木枯らし
が吹く頃です。
北国や高地では、初
冠雪の知らせが届き



しょうせつ・新歴十一月二十三日頃

小雪

冷ゆるが故に雨も雪と
なりてくだるがゆへ也

北日本では、いよいよ
よ初雪の季節です。
暦便覧では、雨も雪
となりてくだる…と
あります。
関東以西の太平洋側
では、カラッと晴れた
日が続く、雪にはまだ
早いです。最低氣温
が十度を下回る日も



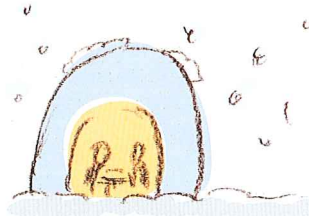
● 仲冬

たいせつ・新歴十二月七日頃

大雪

雪いよいよ降り重ねる
折かならなれば也

文字通り、雪がさか
んに降る頃です。
池や川に氷がはり、
山々はすっかり雪化
粧をし、冬の姿とな
ります。
いよいよ師走に入り、
慌ただしさが増す時
期です。



とうじ・新歴十二月二十二日頃

冬至

日南の限りを行て
日の短きの至りなれば也

一年で最も昼の時間
が短くなる日。
冬至のあとは徐々に
日脚が延びてくるこ
とから、別名「一陽来
復」とも呼ばれます。
また冬至には、風邪を
引かないように願ひ
を込めて、カボチャを
食べて柚子湯に入る



● 晩冬

しょうかん・新歴一月五日頃

小寒

冬至より一陽起るが故に
陰氣に逆らう故益々冷る也

小寒から「寒の入
り」。節分までの三十
日間が寒の内、
いっそう寒さが厳し
くなる時期です。
手紙の寒中見舞いは
寒の内に出します。
この時期の冷たい水
は「寒の水」と呼ば
れます。雑菌が少な



だいかん・新歴一月二十日頃

大寒

冷ゆることの至りて
甚だしきとなれば也

暦便覧では、冷ゆるこ
との至りて甚だしき
ついた「寒餅」を食べ
…と言われる、寒の真
ん中、一年で最も寒い
時期です。
しかし、この寒さの絶
頂を超えれば、もう立
春です。春の訪れが待
ち遠しい季節です。
古くから、この時期の

